社会科

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00061907

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

社　会　科

大塚　有将
岡田　哲典
金田　哲也
共同研究者　加藤　隆弘（金沢大学）

1．Society5.0に向けた教育を進めるに当たって

（1）Society5.0とは

内閣府によればSociety5.0とは，「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより，経済発展と社会的課題の解決を両立する，人間中心の社会（Society5.0）」であり，「狩猟社会（Society 1.0），農耕社会（Society 2.0），工業社会（Society 3.0），情報社会（Society 4.0）に続く，新たな社会を指すもの」1)とされる。では一体その社会はどういった社会なのか，日本の政府や各団体が示しているものからその姿をとらえる必要がある。

まず，この未来の社会の姿について初めて言及されたのが，政府が策定する「10年先を見通した5年間の科学技術の振興に関する総合的な計画」（平成28年1月22日『第5期科学技術基本計画』）であり，そこでは「超スマート社会（Society5.0）」として説明されている。「必要なもの・サービスを，必要な人に，必要な時に，必要なだけ提供し，社会の様々なニーズにきめ細かに対応でき，あらゆる人が質の高いサービスを受けられ，年齢，性別，地域，言語といった様々な違いを乗り越え，活き活きと快適に暮らすことのできる社会」と述べられている。それが内閣府が定義したSociety5.0の「人間中心の社会」に該当するものである。また，経済発展への課題として，単なる大量生産の画一化された工業製品は，他の人件費の安い新興国に値段の上で太刀打ちができなくなってきている現状は経済産業界では知られていることである2)。しかし，「超スマート社会」の考える通り，コスト削減と高品質を維持しながら一人一人に合ったサービスや財を提供することができれば，新興国の工業とは異なる価値を生み出すことができる可能性が広がる。また，コストや資源のロスを減らしながら，様々な社会的諸課題にも，様々な能力を持つ人間が様々なニーズを持つ人々と漏れ無くつながることで解消される可能性を持っている。これらを「仮想空間と現実空間を高度に融合させたシステム」で実現していく，というイメージであろうと考えることができる。

（2）Society5.0に向かう教育の在り方について

この未来の社会への考え方を受けて，文部科学省ではSociety 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会で「Society5.0に向けた人材育成～社会が変わる，学びが変わる～」をまとめ，また，経済産業省も『「未来の教室」とEdTech研究会第一次提言』において教育について述べ，両者に共通して今後重視されるべき方向性が「(公正に）個別最適化された学び」であるとしている。

「個別最適化」とは文部科学省の大臣懇談会においては，「児童生徒一人一人の能力や適性に応じて」最適化することを示し，経済産業省の「未来の教室」においても「子ども達一人一人の個性や特徴，そして興味関心や学習の到達度も異なることを前提にして，各自にとって最適」であることを示している。これらはまさに先述の目指すべき社会の姿である「超スマート社会」の様子であることがわかる。つまりSociety5.0の社会を目指す教育を進めるにあたって最も大切な考え方の一つが「個別最適化された学び」であり，これを得る機会をどのように生み出すか，ということになる。

しかし，そのような社会の実現には，その「人間中心」「人道的」な考え方と手段を良しとする考え

方を多くの人が持つことが必要だが，それを実現する技術やサービスの発展もまた不可欠である。

そして教育においては，その根底に**「多様性の尊重」**があることが，欠かしてはならない視点であると考える[3]。

また，文部科学省は**「(公正に) 個別最適化された学び」**以外に２つ取り組むべき方向性を示している。その一つが「基礎的読解力，数学的思考力などの基盤的な学力や情報活用能力をすべての児童生徒が習得」することである。

ここで，「公正に個別最適化」されたものを目指しながらも，「全員」に身に着けさせるべき「基礎的」「基盤的」な学力が必要だということに矛盾があるように見えるかもしれないが，ここでは基盤的な学力をどのように身に着けるかが，学び方を個別最適化されたものにする方向性と考える。そう考えたときに，本校研究でも「多様性の尊重」を重視しつつ，「基盤的学力」や「情報活用能力」のような資質・能力を身につけられるように教育を行うことは重要である。

「読解力」や「情報活用能力」は，Society5.0 時代において AI や高速通信によりビッグデータをだれもが扱い，情報処理は AI がアルゴリズムに応じて学習していくからこそ，人間の強みであるコンテクストなどを踏まえた読解力や思考力，情報をどのように活用するかという点を伸ばす必要があるということだろうと考えられる。さらに，AI には意思が存在しないし課題意識も無く，一見すると関連性のない情報を関連付けて新たな価値を生み出すこともできない。人間の強みはその点にこそあると考えられる[4]。

（３）Society5.0 を目指す学校教育

ここまで述べたように，課題を見つけ，知識や情報を創造的・論理的に思考し，解決策を見出すという営みこそ人間の強みである。そしてその力はそれが求められる状況になってこそ発揮され，育成されるはずである。

つまり，今後教育に求められるのは，来るべき超スマート社会（Society5.0）において，多様性を尊重する前提の上に，その多様な人々に個別最適化された学びを保証すること。そして実際に課題を解決していく取り組みを通して，情報や知識を活用し，多様な社会的課題を創造的・論理的に解決できる力を育成することと考えられる。

また，本校の学校教育目標において，「将来，社会的使命を果たす生徒」の育成を掲げており，目指す生徒像として第一に「自ら考え学び創造する生徒」を挙げている。よって Society5.0 の社会を共有し，その社会において自らの「社会的使命」を果たす生徒を育成することを目指すことは学校教育目標から見ても，必要な方向性である。

以上のことを実現していくにあたって，学校現場ではどのように考えていくべきなのか。Society5.0 に向けての教育に関して，平成 31 年４月 17 日文部科学省の「新しい時代の初等中等教育の在り方について（諮問）の概要」が出されている。そこでは Society5.0 時代の教育・学校・教師の在り方として，**「①読解力や情報活用能力，②教科固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力，③対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力等が必要」**としている。

ここでは②のように従前の教科の学びを生かし，③にあるように対話・協働をもとに新しい解・納得解を生み出すことが必要であるとしている。ここから考えても課題を解決し，解を得るための活動の中で，様々な力を身につけていくことを重視されていることがわかる。

ここで，社会科という教科で，Society5.0 の社会における教育を考える。社会科の目標にある「社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して」「公民としての資質・

能力の基礎を」育成することは，先述の①②③の実現に向かっていくことと矛盾しないし，共通する点が多い。社会科の目標を目指すことは Society5.0 の社会における教育と当然ながら同じ方向を向いている。しかしながら，現状の社会科において追究すべき社会の課題と自分自身の身の回りの課題との間に距離がある場合も多い。

課題の解決という視点において，本校では平成 14 年から「21 世紀を担う生徒の育成を目指して」という研究主題で「問題解決力」の育成に取り組んできた。その中で，社会科は「思考力，判断力，表現力」の育成に重点を置き，問題解決力の育成に寄与してきた。そこでも問題解決はどのような力から実現するのか分析していた。

しかし，問題解決に必要な力については，先述してきた Society5.0 を想定し目指しての資質・能力ではなく，様々な問題解決のプロセスに必要な過程を分析し，必要な力をそれぞれの教科で育成していく取り組みであった。

（4）本校研究における社会科

本校では創造的に問題を解決する能力の育成を目指し，注目したのは STEAM 教育である。STEAM 教育における学習指導としては，STEAM 領域の学習を現実社会での課題解決に生かした学習内容の実践が求められる。そして，現実社会の課題は，様々な要因が複雑に関わり合っているため，一つの教科の知識や技能を習得しておけば解決できるような課題ではない。だからこそ、教科横断的な学習内容を実践する必要があると考えられている。

そこで本校では，**2 つ以上の STEAM 領域の知識・技能や見方・考え方を働かせて，現実社会の課題を解決する学習内容の実践を計画的に行なっていく**ことを目指している。

ここで社会科の果たす役割を考えたときに，着目すべきは「**現実社会の課題**」を解決する実践という点である。現実社会の課題の解決において「社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して」，「公民としての資質・能力の基礎を」育成することを目標とする社会科はその重要なプラットフォーム的な役割を果たすことができるのではないかと考える。各教科で実践を図ろうとする現実社会の課題解決には，社会的事象を見る目が欠かせないはずである。

そこで，本実践研究の目的を「課題を追究したり解決したりする活動」や「新しい解・納得解を生み出す」活動の授業実践を行う上で，先述までの Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力（図1）という新たな見方を持ち，それらの資質・能力を育成する取り組みにはどのような実践がより効果的か検証していくことと共に，各教科の実践のプラットフォームになる形を模索していくこととする。

図１　本校が定める Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力

「デザイン思考」　「イノベーターのマインドセット」　「より良く生きようとする態度」
「多様性の尊重」　「自然体験や本物に触れる実体験を通して醸成される感性」
「文章や情報を読み解く力」　「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」　「対話する力」
「論理的思考」　「批判的思考」

２．資質・能力の育成に当たって

（1）教科等として育成する資質・能力について

学習指導要領社会編によると，社会科の目標は資質・能力の３つの柱に沿って以下の通り設定されている。

社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

(1) 我が国の国土と歴史，現代の政治，経済，国際関係等に関して理解するとともに，調査や諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

(2) 社会的事象の意味や意義，特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり，社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力，思考・判断したことを説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。

(3) 社会的事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土や歴史に対する愛情，国民主権を担う公民として，自国を愛し，その平和と繁栄を図ることや，他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

上記の社会科の目標は資質・能力の３つの柱に沿って設定されており，その資質・能力と「Society5.0を主体的に生きるための資質・能力」との間で特に関連が深いと考えたのは以下の６つである。

①「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」

上記の目標の中には「よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養う」とあり，関連が深い。

②「多様性の尊重」

これは目標の文言からは「他国や他国の文化を尊重することの大切さ」が相当する。

③「文章や情報を読み解く力」

本校社会科では「調べる」ことには「文章や情報を読み解く力」が必須であるため目標の文言からは「調査や諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる技能」に含まれていると捉えた。

④「対話する力」

目標の文言からは「選択・判断したりする力，思考・判断したことを説明したり，それらを基に議論したりする力を養う」ことに含まれている。また，中央教育審議会でも述べられた「主体的・対話的で深い学び」における，「物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくこと」で求められているものと同義と捉えた。

⑤「論理的思考」

「選択・判断したりする力，思考・判断したことを説明したり，それらを基に議論したりする力を養う」に含まれている。議論とは論理による対話である。道筋を立てて説明することなどを通して身につく資質・能力であると捉えた。

⑥「批判的思考」

批判的思考とは証拠に基づく論理的で偏りのない思考のことであり，多面的，客観的にとらえることで批判的思考が可能になる。これは，「多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土や歴史に対する愛情，国民主権を担う公民として，自国を愛し，その平和と繁栄を図ること」に含まれると考えられる 5)。

このように，これらの資質・能力はどのような手段でどのような資質・能力を育成するのかという社会科の目標に関連が深い点が多く，またそれらの資質・能力がそれぞれ独立した力ではなく，相互に関連した資質・能力である。

（２） 関連・連携を図った教科等について

現実社会の課題解決を行う上で，課題の把握がまず必要となる。課題把握には社会的事象を多面的・多角的に捉えることが大切である。また，その課題の解決が社会にどのようなメリットをもたらすかを理解して課題の解決にあたることは，なぜ学ぶのか，なぜ課題を解決するのかということを共有し，意欲的に学ぶ姿勢にもつながる。よって他の教科等で扱う現実社会の課題の解決には社会科の学習と結びつくものが多いと考えられる。そこで，連携を図った教科，またより連携を行うことができる各教科等の実践についてもまとめていく。

① 社会科の実践において連携を図った教科等

数学科…現実社会においての課題発見や原因の調査など資料の読み取りが欠かせない学習の中で，数学の「数量の関係や法則などを考察する力」との連携が考えられる。

英語科…アフリカなど貧困問題によって困難を抱える地域へのチャリティーイベントを英語で提案するという学習との連携を図った。社会科での学習が生かされている実践である。

理科…「気象とその変化」や「生命の連続性」など，社会的事象がなぜ起こるのかの背景や原因を考える上で連携を図った。その理科で学んだことが課題の把握につながった。

道徳…C「主として集団や社会との関わりに関すること」には自他の権利を大切にすることや安定した社会の実現に努めること，公平に接することなどが明記され，人権を現在の社会の中で改めて考える活動の下地となると考え連携を図った。また，B「主として人との関わりに関すること」における相互理解の項目とも連携を図った。

② 「他教科等から社会科との連携を図った実践」と「連携を図っていなかったが連携を図り得た実践」

数学科…「比例と反比例の利用」の地震を題材とした授業実践は，地震という社会科においても取り扱う事象であり，世界全体の課題となりうる。地理的分野・公民的分野との連携が図れると思われる。

また，「標本調査」では社会的事象を統計的に分析することにつながり，現実の課題の把握・分析に必要な見方・考え方となる。

理科…「力のつり合い」の単元では，橋の構造的な強度を題材としていた。この橋の強度は交通網の整備として耐震化などと関わり非常に重要な課題解決の手段となる。地理的分野や公民的分野での連携が考えられる。

保健体育科…「体つくり運動」の単元でストレス軽減などにつなげて自分に合った運動プログラムを作成するという題材で，現代社会を生きる上での体調管理や超高齢社会にどう対応し，生きていくのかと言った課題解決に寄与するもので，社会的課題の解決の手段となる。公民的分野との連携が考えられる。

技術・家庭科…「生活や社会を良くする『光るもの』をデザインしよう」という回路を活用する題材において，身の回りの社会的課題の解決にもつながりうる題材であり，作るものによっては関連が図れる。

英語科…５Rsを題材にした授業実践ではごみ問題から環境問題について考え，その解決のためのエコ商品を考え，発表しポスターを作成した。

今年度他教科は社会科との連携を意識せずに行われていたが，図り得た実践はある。すでに連携したものと合わせて，社会科で扱う課題と他教科での課題はさらなる連携の可能性があることがわかる。

３．成果と課題

（１）各実践で見られた成果と課題

①１年生

１点目は，アフリカが抱える課題のマインドマップによる視覚化である。現在起きている問題を個別のものとして捉えるのではなく，それらの問題同士が繋がることで，より解決を難しくしている複雑さに気付くことができた（図２）。また，１つの問題を，労働者や雇用主，国家などの多様な視点から分析し，問題が長期化してしまう原因について考察する姿が見られた（図３）。恒常化している問題が何に起因しているのかを明確にするためにも，マインドマップによる課題の整理は有効であったと考えられる。これらの見方・考え方を使うことが，「批判的思考」の資質・能力の育成に寄与したと考えられる。

図２

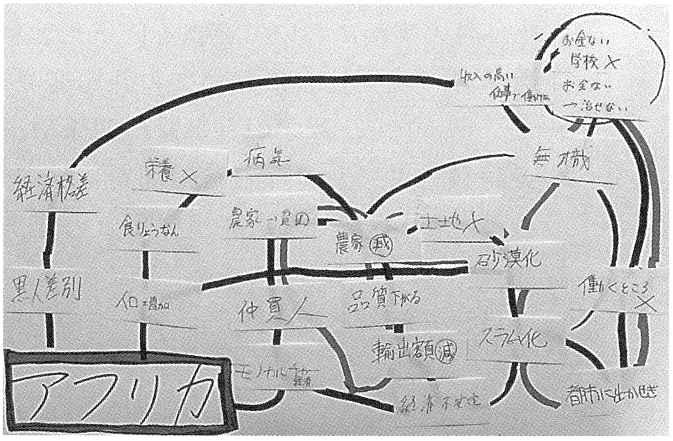
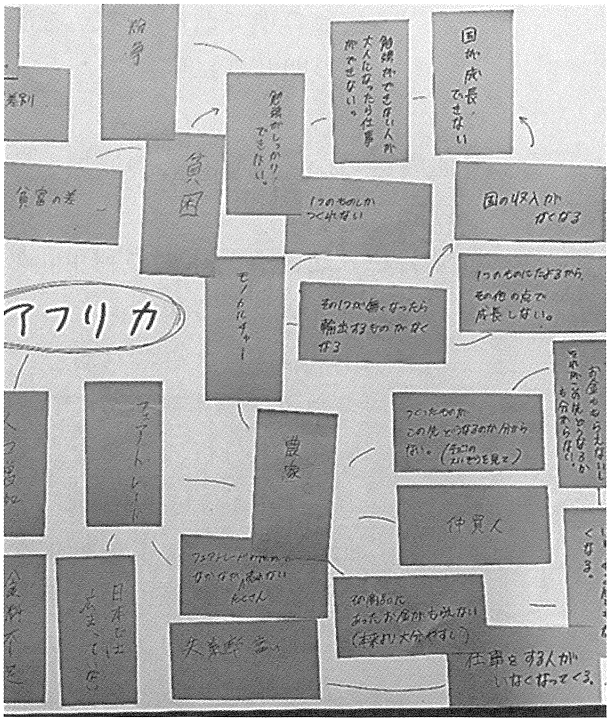


図３



２点目は，オンライン会議システムを用いた外部講師へのインタビューについてである。教科書やインターネットからの情報では理解しきれない現地の生活や，文化について学ぶことができた。生徒もアフリカの課題解決に向けた提案を目的としてインタビューに臨むことができたため，より具体性のある質問を講師に投げかけるなど，学びに向かう姿勢の深まりが得られた。

また，生徒が想定していたアフリカのイメージが覆される話も多く，その都度グループの仲間で話し合い，解決策を修正し，思考し続ける様子が見られた。これにより，「対話する力」やその対話によって生じる「批判的思考」が引き出せたと考えている。

３点目は，考えた解決策に優先順位を付ける活動についてである。グループごとに考えた最善の解決策を，学級で議論することを通して，生徒１人１人が自分の考えや立場を明らかにすることができた。これも「対話する力」やその対話によって生じる「批判的思考」が引き出される場面を作ることができた。

以下，２点目と３点目の成果が現れた生徒の変容の例を挙げる。

生徒Ａは，マインドマップを作成した段階では，アパルトヘイトなどの人種差別に問題意識をもち，解決策を思案した（図４）。だが，外部講師からの話やインタビューを通して，アフリカの発展した側面や，自身の抱いていたイメージとの差に気づくことができた。それにより，アフリカの印象や情報を正しく世界に発信することが優先すべきという考えに至ったことが分かる（図５）。

生徒Ａは，学級内での議論を経て，アフリカの課題の多様性を理解した上で，なお偏見やイメージを正すことが必要だと考えており，他国からの支援や労働力を受け入れやすくすることで経済を活発にできると主張していた。グループで話し合う活動を通して，アフリカをよりよくしようとする手段と，その影響を詳細に構想することができた。

また，生徒Ｂは学習当初と比較したときに，大きく意見を変容させた生徒である（図６）。

生徒Ｂは，マインドマップの作成から，アジア州と似ている生活の様子に問題意識を向けて学習を始めたが，インタビューで得た情報を基に，イメージの変化を求めたことは生徒Ａと似た変容だった。生徒Ａとは，所属していたグループは異なるが，自身がアフリカに対して抱いていたイメージとの違いが印象深かったものと思われる。ただ，「景気が良好でなければ，貧しい生活をする人達にまで支援が行き渡らないため，イメージの改善が必要だ」という発表をしており，前時の構想を批判的に見つめ直し，発展させることができた。

図４　生徒Ａのアパルトヘイトなどの人種差別に対する問題意識

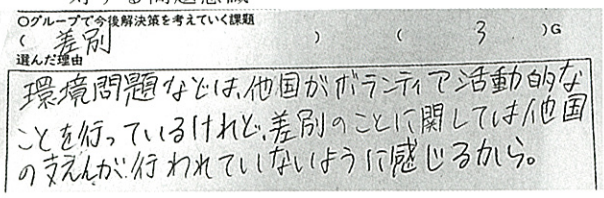


図５　生徒Ａのインタビュー後の問題意識

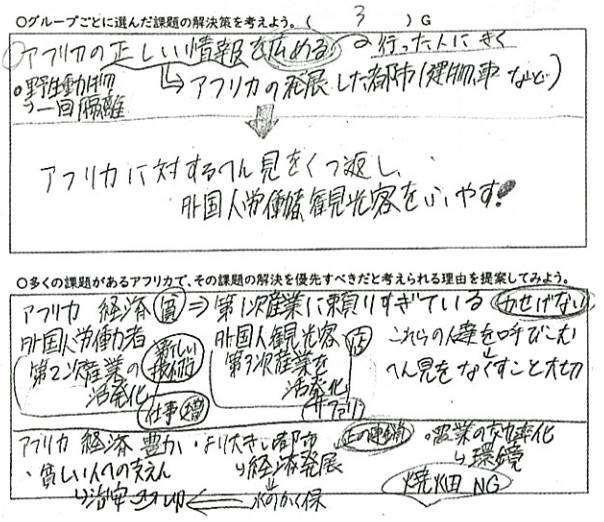
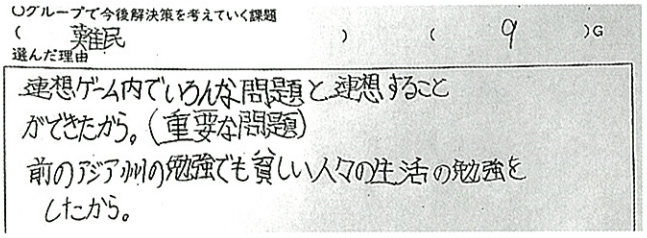
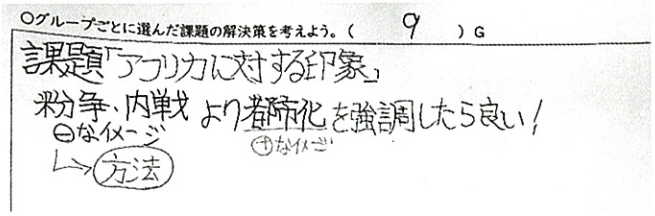


図６　生徒Ｂの意見の変容

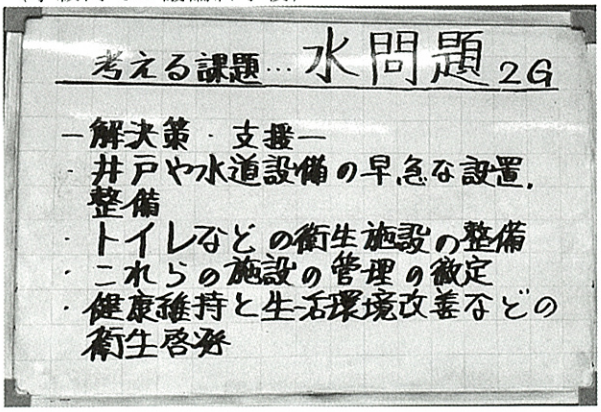
〈アフリカに関するマインドマップの作成後〉



〈外部講師へのインタビュー後〉



〈学級内での議論終了後〉



しかし，学級内での議論を経て，水や衛生環境への問題意識が移ったことが生徒Ｂの大きな変化である。生徒Ｂは，クラスの仲間達の意見を聞く中で，アフリカの人々が日々直面している問題の方が優先度は高く，飲み水の確保や健康の保障が必要だと考えていた。

生徒Ｂの意見は，貧しい生活をする人々への支援に軸を置きながらも，グループや学級での対話を通して，多様な価値観を受け入れることで多面的・多角的な思考を深めることができた。

しかし，本実践から見えた課題としては，以下のことが考えられる。マインドマップの整理には，グループごとに考察の深まりには差が生まれ，問題同士の関係性に目を向けるための手立てが必要だと考えられる。

また，解決策を議論する上で，話し合う内容に深まりを求める支援方法については，今後も断続的または継続的に研究することが望ましい思われる。期間的な目標を設定することや，誰を対象に支援をするかといった深まりを生む議論が，生徒から自発的に生まれる場の設計に努めたい。

② ３年生

公民的分野の人間の尊重と日本国憲法の基本原則に関する授業実践である。本時の学習課題を「人権が尊重される世の中のためには，何が必要だろうか」と設定し，新しい人権に関する学習の一環として，生徒が新しい人権の具体例を考案した。これにより「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」「多様性の尊重」と共に課題を主体的に解決しようとする態度の育成にも寄与することを狙いとした。

１つ目に本実践では「多様性の尊重」やそれに伴う「持続可能な社会」を志向するような考えが多く見出されたことである。

例えば，安楽死や尊厳死について考察し日本で認めていく必要を論じる意見が見られた。海外では認められているのに，日本では認められていないという点が、興味関心を高めていたようである。

また，一般的な「学校」という場でなくても、できる限り学校に近い環境や状況で教育を受ける権利について言及したグループもあった。教育を受ける権利に関連して，より現代の実情に合った形での提案(不登校生に授業を配信するなど)につなげて発表を行っていた。

上記の意見と関連して，別のグループでは日本国憲法第２６条の，「その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利」について，小中学校のような義務教育段階では『ひとしく教育を受ける』の部分に，高校以降では『その能力に応じて』の部分に，より重点が置かれているという見方をしていた。新しい人権とは必ずしも言えずとも，より現代に応じた解釈へ広げ，多様なニーズに合うようにしていく考えが引き出せた。

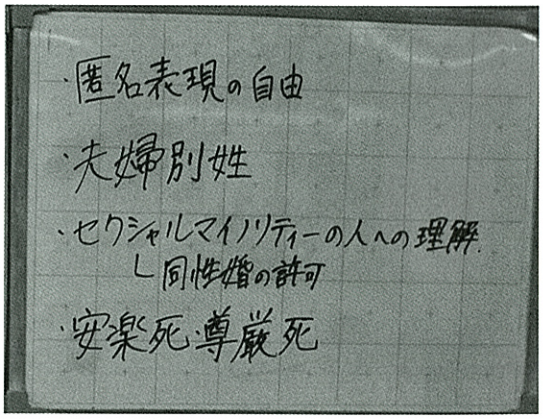


図７ 安楽死などを論じたグループのホワイトボード

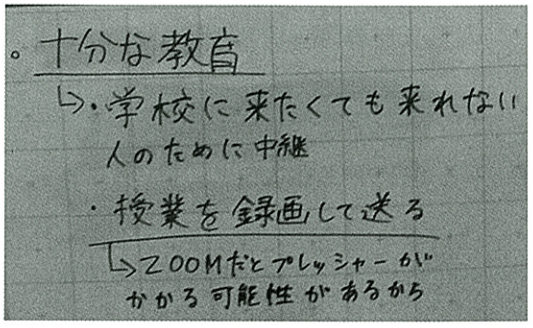


図８ 教育を受ける権利について論じたグループのホワイトボード

（２）本校社会科の成果と課題

教科の特性上，現実社会のことが題材になることがほとんどである。よって図９のように生徒への質問紙調査においても実社会とのつながりは全教科の中で最も高い結果となった。先述の各実践で現実の課題について考えていたことも関連していると考えられる。

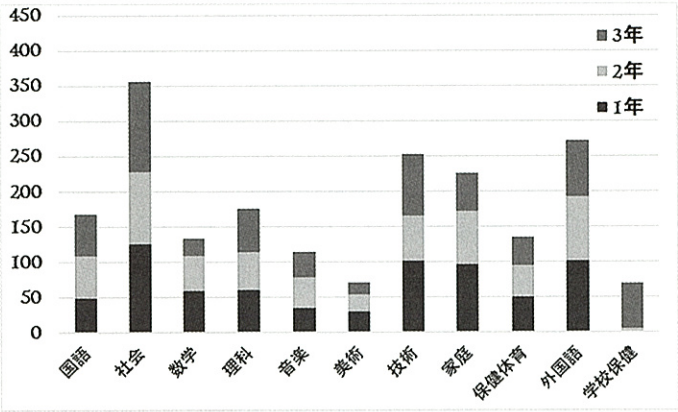


図９ 実社会とつながりがあると感じる教科

社会科は本稿２（１）でも述べた通り，社会科の見方・考え方を使って課題を追究したり解決したりする活動を行うことが目標になっている。課題解決には大きく分けて，課題の発見・分析・明確化から，解決策を立案し，実行するというプロセスがあると考えられる。この中で課題の発見・分析・明確化は１年生の実践の通り，社会科の見方・考え方が肝要である。さらに，課題を解決する意義は社会科の見方・考え方によって見出すことができる。

課題の解決や立案は社会科において考えることができる。それらを精査し，実行する上では，解決策によっては社会科のみならず，様々な教科の見方・考え方が必要となる。

例えばアフリカの水問題の解決には社会的な手段もあれば，当然科学技術が必要になってくるだろうし，食糧問題であれば農業技術の発展も手段の一つである。

しかし下の図１０，１１にある通り，どちらも他教科と比べると高い結果ではあるが，生徒たちは社会科が他の教科と関連していると感じているか，という点において先ほどの図９に比べ低い数値である。

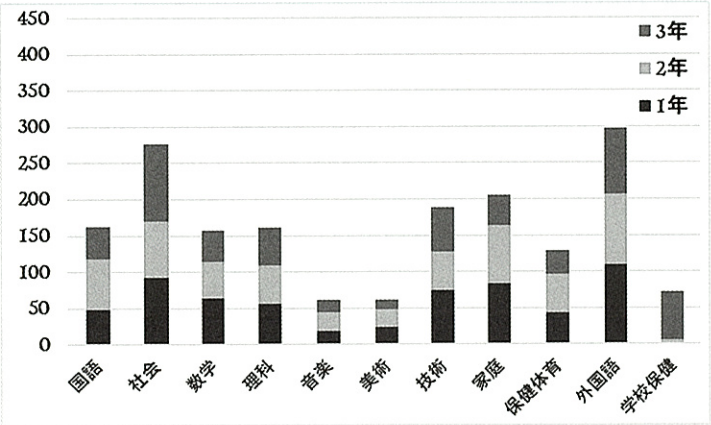


図１０ 学んだ知識や技能，考え方が，実社会で役に立つと感じる教科

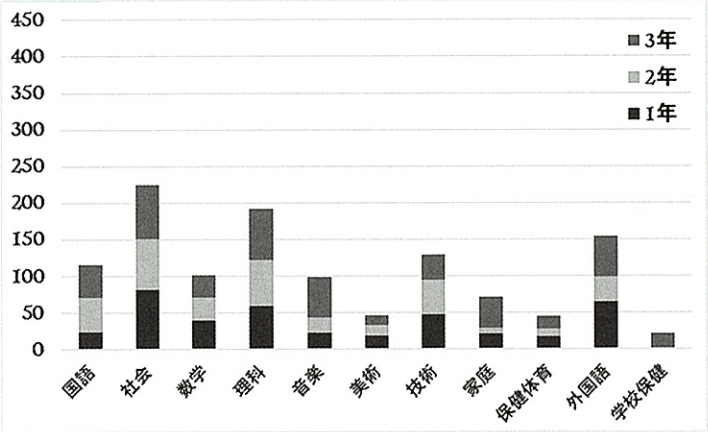


図１１ 複数の教科の知識や技能，考え方が含まれており，学びが深まったと感じる教科

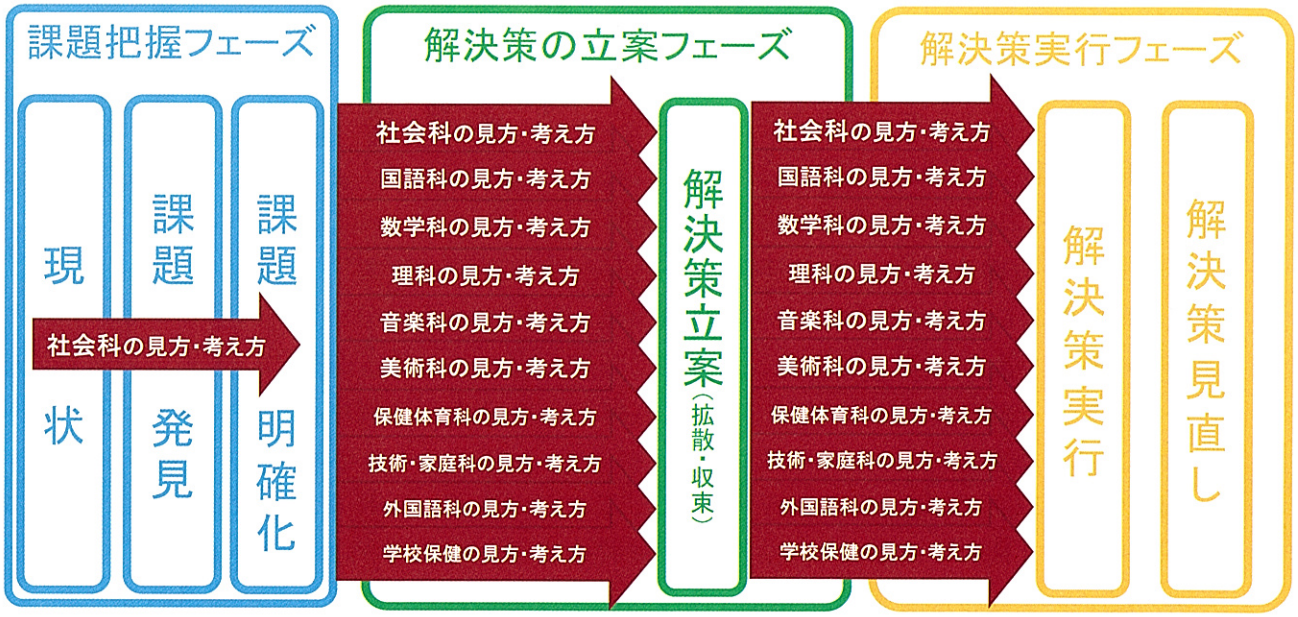
現実社会の課題を解決しようとしたとき，課題の発見・分析・明確化は社会科の見方・考え方をもって行い，各教科の見方・考え方を活用することへつなげることをさらに意識して実践を行っていきたい（図１２）。しかしここで問題になるのは課題の解決策は学習者によって多数あることである。どの教科の見方・考え方を使うのかは学習者に任されてしまう。

それでは各教科の時間だけでは STEAM 教育によるカリキュラム開発は行えない。よって総合的な学習の時間などが課題解決の場となる形の中で，社会科は少なくとも課題のプラットフォームとしての機能を果たすべきであると考える（図１２）。そうなれば他教科のカリキュラムを崩すこと

なく，複数の教科の見方・考え方を使って課題の解決を図る，課題解決学習となると考えられる。

さらにプラットフォームから課題解決へ向かって発信していく原動力である生徒の意欲を引き出し，学習を行って行くことは今後の課題となるだろう。

図１２　課題解決学習の段階と社会科の役割



４．参考文献

1)内閣府：第５期科学技術基本計画，pp.10-11(2016)

2)経済産業省・厚生労働省・文部科学省：「2016 年版ものづくり白書」，pp.112-116(2016)

3)吉村 隆：「第８回産業構造審議会産業技術環境分科会研究開発・イノベーション小委員会資料」，pp.6-10(2019)

4)安宅　和人：「シン・ニホン」，株式会社ニューズピックス

5)楠見　孝：良き市民のための批判的思考　特集「批判的思考と心理学」，心理学ワールド，No.61, 5-8. (2013)

実践事例

社会１年

授業者	大塚　有将	授業日	１１月　１０日（火）

授業クラス（時限）	関係・連携の考えられる教科等と学習内容
１年１組～４組	英語　program７「If you wish to see a change」

Society5.0を主体的に生きるための資質・能力	教科等で身に付けたい資質・能力
・「対話する力」 ・「批判的思考」 ・「よりよく生きようとする態度」	・多様な問題の中から，より根本的な課題に絞るために優先すべきものを選び，多面的・多角的に思考することができる。【社会的な思考・判断・表現】

実社会とのつながり

本単元では，アフリカ州における課題に対して，どのような支援方法が考えられるか思考する活動を行う。また，多様な課題に対して優先すべき理由を考え，議論する活動を通して，アフリカ社会の根本に生活基盤の不安定さがあることに気づかせたい。
これらの活動を通して，社会に数多く存在する課題に対して，優先すべき問題を多面的・多角的に考え，選ぶことができる力につなげたい。

本時の授業のねらい

複数の支援策の中から，優先順位をつける議論を通して，課題を追究し社会をよりよくしようと思考する。

授業の流れ・活動等	時間
１．　前時に青年海外協力隊員にインタビューした内容や，グループ内で話し合ったアフリカ州の課題をグループごとに確認する。	５
課題：アフリカ州における課題に対して、どのような支援や対策ができるのだろうか。	
２．　グループごとに，アフリカ州の多様な課題の中から，最優先に取り組むべき課題を決定する。 また，選択した課題に対して，考えられる支援の方法や解決策をホワイトボードにまとめる。	１３
３．　グループごとに支援方法を１分ほどで発表する。 （優先すべきと判断した理由について，根拠を明らかにして発表する。）	１２
４．　９つのグループから提案された課題と支援方法を元に，どの課題に対して優先的に取り組むべきか，クラスで議論する。	１５
５．　本時の学習の振り返りと，単元を通して考えた自分の意見をまとめる。	５

1年　単元名「アフリカ州―特定の生産品にたよる生活からの変化」

単元計画（5時間扱い）本時は5時間目

次	時	学習内容・ねらい（■） 主な活動等（丸数字）	評価規準・手立て（○） 指導上の留意点（・）	他教科等との連携・本校が定めるSociety5.0を主体的に生きるための資質・能力
1	1	■アフリカ州の自然や歴史と文化，産業の特色について，様々な資料を基に概観し，基礎的な知識を身につける。 ①雨温図から主な気候について読み取る。 ②ペアでの学習に取り組み，アフリカの歴史と言語環境のつながりを考察する。	○広大な砂漠をもつ自然，歴史や伝統文化，産業などの特色について理解している。【社会的事象についての知識・理解】	「文章や情報を読み取る能力」
	2	■アフリカ州の産業の特色について，主題図や貿易統計から読み取る。 ①アフリカ州の産業の構造について，主題図を基に読み取り，まとめる。 ②モノカルチャー経済の課題から，フェアトレードを日本で広めるためにどのような方策が考えられるかグループで考える。	○アフリカ州の産業と工業の特色や問題点を，様々な資料の関連づけから読み取っている。【資料活用の技能】	「文章や情報を読み取る能力」 「論理的思考」
	3	■アフリカ州の課題を，資料やインターネットから得た情報を基に考察する。 ①教科書や資料集，インターネットを通じて，アフリカ州が抱える課題や，日本が行っている支援について理解する。 ②調べたことや，既習内容から更に知りたいことや追究したいことをまとめる。	○写真や表，インターネットで調べた情報から，アフリカ州では都市化が進む一方で，農村地域との格差や生活水準が異なることなどの課題を考察している。【社会的な思考・判断・表現】	「文章や情報を読み取る能力」 ・英語
	4	■南アフリカ共和国の現在の様子や，さらに知りたいことについて追究することを通して，アフリカ州に必要な支援について考察する。 ①南アフリカ共和国へ青年海外協力隊として派遣されていた赤塩氏へのオンラインでのインタビューを通して，より具体的なアフリカ州の現状について理解する。 ②グループ毎にアフリカ州の抱える課題と課題に対する支援策を立案する。	○青年海外協力隊員への質問や解答から，アフリカ州の現状について関心を持ち，意欲的にグループワークに取り組んでいる。【関心・意欲・態度】 ○インタビューした内容を基に，どのような支援策が考えられるのか思考している。【社会的な思考・判断・表現】	「対話する力」 「論理的思考」
	5（本時）	■複数の支援策の中から，優先順位をつける議論を通して，課題を追究し社会をよりよくしようと思考する。 ①グループ毎に立案した支援策を基に，最優先となる案を生徒同士の議論によって考察する。	○多様な問題の中から，より根本的な課題に絞るために優先すべきものを選び，多面的・多角的に思考することができる。【社会的な思考・判断・表現】	「対話する力」 「批判的思考」 「よりよく生きようとする態度」

実践事例

社会２年

授業者	岡田　哲典	授業日	１１月　１０日（火）

授業クラス（時限）	関係・連携の考えられる教科等と学習内容
２年全クラス	総合「３年生　金沢探求」 家庭「衣食住の生活　日常食の調理と地域の食文化」 技術「材料と加工の技術　社会の発展と材料と加工の技術の在り方」 美術「表現　デザインや工芸などに表現する活動」

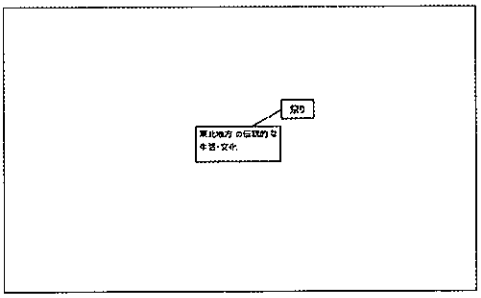
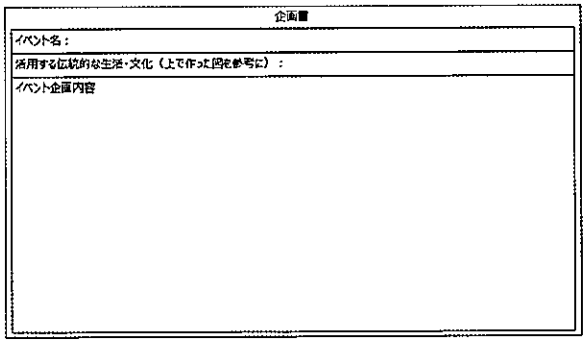
Society5.0を主体的に生きるための資質・能力	教科等で身に付けたい資質・能力
・持続可能な社会を志向する倫理観・価値観 ・批判的思考 ・デザイン思考	・東北地方の地域的課題の解決策を考察し，適切に表現している。 【社会的な思考・判断・表現】

実社会とのつながり

東北地方の地域的特色を捉え，伝統的な生活や文化，災害からの教訓を通して，その自然環境や歴史的背景，他地域との交流などから多面的に考察する単元である。しかし東北地方ではその他の地方や我が県と同様に，人口の減少や過疎化，産業の衰退が起こり，伝統的な生活や文化もまた衰退している。
よって単元のまとめとして，東北地方の産業活性化を目指し，課題の解決を図ることで，我が県や諸地域の課題解決につなげていきたい。また，その課題解決を考える上では，新たな産業や文化のではなく，今ある資源を活用することで持続可能な発展を目指す。よって，東北地方の伝統的な生活や文化の特色を生かすように留意し，活性化策を考えさせる。

本時の授業のねらい

東北地方の地域的課題の解決策を，東北地方の伝統的な生活・文化を生かし，多角的に考察し表現する。

授業の流れ・活動等	時間
導入 １．石碑や伝承などで得た教訓から東北地方ではどのように街づくりを行っているか，資料から読み取り，今後の社会の在り方について考察する。	5
２．ここまでの学習から東北地方の課題を挙げる。 ・震災復興のためにも，災害への対策のためにも，地域の活性化が重要であることに気付かせる。	5
展開 ３．ここまで学習した東北地方の生活や文化を列挙しマッピングする。  	5
４．マッピングした生活や文化を活用したイベントをグループで話し合いまとめる。  企画書 イベント名： 活用する伝統的な生活・文化（上で作った図を参考に）： イベント企画内容	20
５．発表	10
振り返り	5

２年　単元名「東北地方」

単元計画（５時間扱い）本時は５時間目

次	時	学習内容・ねらい（■） 主な活動等（丸数字）	評価規準・手立て（○） 指導上の留意点（・）	他教科等との連携・本校が定める Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力
1	1	■３つの山地や海岸線に着目して東北地方の地形の特色を捉える。 ①東北地方の地形や人口の分布を地図や人口分布図を読み取り，まとめる。 ②雨温図と地形の断面図を読み取り，なぜ雨温図にみられるような気候の違いが生まれるのか考えまとめる。	○東北地方を地形の特色を３つの山地を中心に平地，海岸線との関係から捉え，理解している。 【社会的事象についての知識・理解】	「文章や情報を読み解く力」
	2	■人口分布図や地形図，交通網，産業の分布図を示した資料などを関連付けて地域的特色を捉える。 ①どのような人口分布の特色があるか，地形図，交通網を関連付けて考える。 ②産業の特色を自然的地形と関連付けて特色を捉える。 ③産業の分布から東北地方の産業の特色を捉え，伝統的なものが継承されてきたのはなぜか，予想する。	○自然を生かした産業が伝統的に盛んであることや交通網の発展とともに工業や人口にも影響を及ぼしていることを資料から読み取っている。 【資料活用の技能】	「文章や情報を読み解く力」
	3	■伝統的な民俗行事の資料を通して，東北地方の生活・文化に関心を持つ。 ①「なまはげ」や「あまめはぎ」などの民俗行事，および秋田の竿灯まつりのような祭りなどが行われてきた目的を考える。 ②伝統的な食文化（漬物など）の背景にはどのような自然的条件や社会的条件があるか，予想し調査する。 ③各地に伝わる民話が自然災害や様々な教訓を伝えていることを複数の民話から読み取る。	○祭りをはじめとする独特の民俗行事や習慣を示す資料を通して，東北地方の生活・文化に関心を持ち，意欲的に追及している。 【社会的事象への関心・意欲・態度】	「文章や情報を読み解く力」
	4	■東北の伝統産業や地場産業の特色と課題を通して，生活と結び付いた産業の特色を捉える。 ①それぞれの伝統産業や地場産業が生まれる背景を，その土地の自然環境の学習を振り返りながら，鉄鉱床の分布や森林資源に着目して，捉える。 ②どのような条件の地域で工業生産が高まっているのか読み取る。 ③東北地方の産業の課題を捉える。	○東北地方の伝統産業の課題について，後継者不足，輸入品の増加による生産停滞などの現状を理解し，その知識を身につけている。 【社会的事象についての知識・理解】	「文章や情報を読み解く力」
	5 本時	■東北地方の地域的課題の解決策を，東北地方の伝統的な生活・文化を生かし，多角的に考察し表現する。 ①得た教訓から東北地方ではどのように街づくりを行っているか，資料から読み取る。 ②東北地方の特色ある産業・生活・文化を活用して，活性化させるイベントの企画を行う。	○東北地方の地域的課題の解決策を考察し，適切に表現している。 【社会的な思考・判断・表現】	「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」 「批判的思考」 「デザイン思考」

実践事例

社会３年

授業者	岡田　哲典	授業日	１１月　８日（金）

授業クラス（時限）	関係・連携の考えられる教科等と学習内容
３年全クラス	総合「３年生　金沢探求」 家庭「衣食住の生活　住居の機能と安全な住まい方」 技術「材料と加工の技術　社会の発展と材料と加工の技術の在り方」

Society5.0を主体的に生きるための資質・能力	教科等で身に付けたい資質・能力
・持続可能な社会を志向する倫理観・価値観 ・批判的思考 ・デザイン思考	・身近な地域のまちづくりについて調べ，政治参加の在り方を構想し，表現している。【社会的な思考・判断・表現】

実社会とのつながり

本単元は地方自治の基本的な考え方を学習する。その際，地方公共団体の政治のしくみと住民の権利や義務について理解し，主権者としての政治参加の在り方について多面的・多角的に考察，構想し，表現することを通して，住民としての自治意識の基礎を養うようにすることを狙いとする。上記の狙いを達成するうえで，金沢市の目指す「世界の交流拠点都市金沢」における課題を参考に，総合的な学習の時間での金沢市の観光をテーマとした学習と関連付け，金沢の持つ魅力を伸ばす上での課題の解決を考えて，パブリックコメントを行うことを目指して学習活動を展開していく。

本時の授業のねらい

観光振興を目指すうえで，伝統的な建造物群の保存や伝統的な営みや行事の存続が求められるが，失われていく現状をどのように解決していくか考える。

授業の流れ・活動等	時間
導入 １．金沢の魅力と課題を知る ・旅行会社の旅行先ランキングと旅行目的のデータを参考に，観光地としての人気は，その地域の独自性などから生まれていることを確認し，独自性を生み出す文化に着目させる。	5
展開 ２．課題の分析と解決の取り組みを考察する　（プリントとiPadの資料を使う） ・どのような課題とその原因があるのか資料から読み取る。 旧城下町区域の世帯人員，高齢世帯数，空き家の増加の資料を提示し，旧城下町区域が現在少子高齢化が進んでいることを読み取る。 歴史的建築物の消失，伝統的行事や営み，伝統産業の減少の資料を提示し，旧城下町区域の少子高齢化と関連付けて理解する。 ・上記の課題と原因から，どのような取り組みが考えられるか話し合い，具体的な対策を持つ。	30
３．発表 ・歴史的建造物の消失や伝統的行事や営みが減少していることを中心地の人口増加などからも取り組むことを提案したり，自らが伝統的な文化に触れることからでも自らができることを共有する。	10
まとめ ４．まとめとふりかえり	5

３年　単元名「地方自治と私たち」

単元計画（６時間扱い）本時は５時間目

次	時	学習内容・ねらい（■） 主な活動等（丸数字）	評価規準・手立て（○） 指導上の留意点（・）	他教科等との連携・本校が定める Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力
1	1	■身近な地域の政治に関心を持ち，住民の一人としてどのような住民自治ができるか追及する。 ①地方自治が「民主主義の学校」と呼ばれるのはなぜか考える。 ②金沢市を例に地方公共団体の行う政治においては地域の課題によって異なること，住民たちの政治参加の意義に気づく。	○身近な地域の政治に関心を持ち，自分も住民の一人として住民自治を担う存在であることに気づいている。 【社会的事象への関心・意欲・態度】	
		パブリックコメントで金沢市へ政策を提言しよう。		
	2	■地方公共団体の政治の仕組みを理解し，住民が持つ直接請求権を，実際の事例を通して金沢市の地方自治への参加の手段としてあることを理解する。 ①金沢市で近年制定された自転車条例と宿泊税条例がどのような経緯で制定されたのかを調べる。	○地方自治の仕組みを，地方議会と首長の役割と住民に直接請求権が認められていることを理解する。 【社会的事象についての知識・理解】	
	3	■金沢市や石川県の実際の財政状況を広報誌の資料から読み取る。 ①地方の財源と市町村の歳出が変化していることを読み取り，財政における課題をつかむ。 ②財政上の課題の解決へどのような取り組みがなされてきたか理解する。	○地方財政の歳入と歳出，地方財政の課題について，統計資料を基に的確に読み取っている。 【資料活用の技能】	
	4	■地方自治にどのような関わり方があるか多面的・多角的に考察する。 ①金沢市を例に住民投票が行われる課題を想定し，金沢市の課題を知る。 ②どのように中学生である自分が関われるのか，考察する。	○自分と地域の政治とのかかわりについて，多面的・多角的に考察している。 【社会的な思考・判断・表現】	
	5 本時	■観光振興を目指すうえで，伝統的な建造物群の保存や伝統的な営みや行事の存続が求められるが，失われていく現状をどのように解決していくか考える。 ①金沢の魅力と課題を知る。 ②課題の分析と解決の取り組みを考察する。	○身近な地域のまちづくりについて調べ，政治参加の在り方を構想し，表現している。 【社会的な思考・判断・表現】	「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」「批判的思考」「デザイン思考」
	6	■大単元の導入で行った市長選挙の１０年後を想定し，自分自身が市長に立候補しどのような政策を行うか考えることで，関心を持つ。 ①どのような提案をするか話し合い，公約を発表。 ②模擬選挙を行う。	○政治に対する関心を高め，今後主権者として政治にかかわろうとする態度が見られる。【関心・意欲・態度】	

実践事例

社会３年

授業者	金田　哲也	授業日	１０月　８日（木）

授業クラス（時限）	関係・連携の考えられる教科等と学習内容
３年１組（１限）　３年２組（２限） ３年４組（４限）　３年３組（５限）	道徳（C(10)遵法精神，公徳心）

Society5.0を主体的に生きるための資質・能力	教科等で身に付けたい資質・能力
・持続可能な社会を志向する倫理観・価値観 ・多様性の尊重	・認められてきているもの以外の新しい人権について考え，それを発表，提唱する活動を通して，人権の尊重についての考え方をより深める。 【社会的な思考・判断・表現】

実社会とのつながり

本単元においては，新しい人権について学ぶ。本時では，まだ提唱されていないような新しい人権について考える活動を行う。活動を通して，人々がより幸せに暮らしていける世の中について考えたり，現代社会に見られる課題の解決を目指したりする考え方を育てることにつなげたい。

本時の授業のねらい

どのような新しい人権があれば，人はもっと幸せになることができるかを考えることによって，人権の尊重についての考え方をより深めることができる。

授業の流れ・活動等	時間
１．これまでに学習してきた人権について振り返る。 自由権，平等権，社会権，新しい人権	６
２．課題の提示　「人権が尊重される世の中のためには，何が必要だろうか」 誰もが，もっと幸せに生きていくことのできる世の中のために，あったらいいなと思える新しい人権を考え，発表する活動を行うことを説明する。 条件　・これまでに学習してきた人権の枠内では保障できないことを考える ・すでに提唱されているが，まだ尊重されているとは言えないものでもよい	４
３．活動（その１）　グループで話し合い，考える。 各グループに渡したタブレット端末を用いて法令などを調べてもよい	２０
４．活動（その２）　グループごとに１分程度で発表する。	１２
５．まとめとふりかえり	８

３年　単元名「３節　これからの人権保障」

単元計画（４時間扱い）本時は４時間目

次	時	学習内容・ねらい（■） 主な活動等（丸数字）	評価規準・手立て（○） 指導上の留意点（・）	他教科等との連携・本校が定める Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力
1	1	■産業や科学技術の発展は人を幸せにするのか，人権尊重の視点から考える。 ①新しい人権に対して，具体的な事例から関心を持つ。 ②産業の発達と新しい人権について関心を持つ。 ③医療など科学技術の発展と新しい人権との関連に対して理解する。	○産業や科学技術の発展によって，人権が侵害されるおそれが出てきたことに関心を持ち，意欲的に追究しようとしている。 【社会的事象への関心・意欲・態度】	「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」
	2	■情報化の進展は人を幸せにするのか，人権尊重の視点から調べる。 ①知る権利や情報公開制度について，身近な事例から調べる。 ②プライバシーの権利や個人情報保護制度について，身近な事例から調べる。	○知る権利，情報公開制度，プライバシーの権利，個人情報保護制度について調べ，説明することができる。 【資料活用の技能】	「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」
	3	■グローバル化は人権にどのような影響を与えているのかを知る。 ①国際的な人権発展の歴史について理解する。 ②国際的な人権保障に向けた動きや組織について調べる。	○グローバル化に伴う人権問題や，国際的な人権保障に向けた組織や動きについて理解している。 【社会的事象についての知識・理解】	「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」
	4 本時	■人権が尊重される世の中のために，何が必要なのかを考える。 ①あったらいいと思う新しい人権についてグループで話し合い，考え，発表する。	○認められてきているもの以外の新しい人権について考え，それを発表，提唱する活動を通して，人権の尊重についての考え方をより深める。 【社会的な思考・判断・表現】	「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」「多様性の尊重」 （道徳：C(10)遵法精神，公徳心）